野地潤家 著

国語教育の探究

野地潤家先生は、昭和五十九年三月、三十六年間勤めておられた広島大学を退官された。

本書は先生が広島大学で教鞭をとられた最終年度である昭和五十八年度に行なわれた講演・講義を収録したものである。

まず、本書第I章に収められた「国語学習の極印と深化」は、昭和五十八年八月十二日に開催された第二十四回広島大学教育学部国語教育学会における講演の記録である。この日先生は、大州中学校時代の自らの国語学習経験の中から、極印として胸に刻まれた数々の出来事を資料をもとにしてさわやかに語られた。

その一例として、第Ⅰ章三「白田時太先生のこと」に収められた部分を紹介したい。ここには先生の恩師である白田先生との心に残る出来事が述懐されているが、なかでも心をうたれるのは、中学卒業後進学を断念し、税務署へ勤めることになった先生へ、白田先生が「潜龍地に在り」という言葉を送られたという部分である。「一人だけ進学をあきらめて就職する私に、決してくじけるな、決して自分でも、小さく、過小評価しないように（略）、『潜龍在地（せんりょうさにあり）』というその四つの言葉がどんなに、私の精神のささえになったか。税務署に入って三日目に、ここは麻雀ばかりしているところで、私のおる所ではないというふうにして、すぐに退署を決意致しまして、表面には出しませんで半年間はがんばりました。」ここに、野地先生の国語教育研究への情熱を育んだ「極印」をみることができる。

次に、第Ⅱ章に収められている「国語教育研究の拠点と方法」は、広島大学での先生の最終講義（昭和五十九年二月二十五日）の記録である。Ⅱ章の目次によって内容を見ると、次のようになっている。

一生活記録（日記）から――研究生活のこと――／二話しことばの生態と教育1戦災前の広島市内でゆきずり耳にしたことば　2感動詞の生態――夜祭のことば――3話しことばの生態――A氏（作家）のばあい――／三　戦後初期の話すことの授業――愛媛県立松山城北高女三年生――／四　話しことばの実態と文法教育1話すことの文法学習――中学校――　2話しことばの実態と話すための文法――高等学校――／五　ことばの発達と家族環境／六三つの対話――心が通うということ――　1松山からの手紙　1あるる卒業生からの手紙　2弟からの遺書

一では、先生のこれまでの研究一筋の歩みが、六十九冊の日記に記録された言葉を介して述懐されており、二～四には、先生の国語教育学研究の中核となった「話しことばの教育」に関して、話しことばの研究のあり方、又学習指導のあり方がのべられている。さらに五では、御長男の生後一年から満六歳に至るまでの言葉を集められたことをもとに、ことばの発達に関して考察を加えられており、六では、心を通いあわせることこそがことばの重要な機能であることがうたわれている。

最終講義の当日、会場は超満員の聴衆で埋まっていた。講義が始まり、佳境に入り、そして静かに終った時、会場中がえもいわれぬ感動につつまれていたのを覚えている。本書は多くの人々の胸を熱くさせたあの日の講義をよみがえらせてくれるものである。

なお第Ⅲ章として著述・研究発表等の目録が付記されており、先生の研究の足跡をたどる手がかりとなっている。

（A5判、二三〇ページ、昭和六十年十一月一日、共文社刊、二、二〇〇円）

（池田　悦子）